



人間関係

永田円了

Where Hearts Touch

人の幸せとは何だろうか。ハーバード大学 Waldinger 教授は、その問いに一つの素朴な答えを出した。

「良い人間関係が、人を幸せにし、健康にする」と。それはあまりにも簡潔で、どこか拍子抜けするほどである。しかし、歳を重ねるほどに、その言葉は深く沁みしてくる。私自身、70 余年の歩みの中で、ようやく同じ場所にたどり着いた気がしている。

人は、何かを得ることで満たされるとは思わない。誰かとどのようにあるか、その関係性の中で、静かに満たされてゆくのではないだろうか。けれども、その関係もまた、最初から成熟しているわけではない。はじめは、人は「くつつく」ことで安心する（第一フェーズ）。離れぬように、確かめるように、互いに寄り添う。それは、まだ自分という輪郭がやわらかく、他者のなかに自分を預けているような在り方である。

やがて人は、そこから離れようとする。自らの足で立ち、自らの声で語り始める（第二フェーズ）。一粒の甘納豆のように、それぞれが独立し、光を浴びる。その姿は美しく、ときに人を引きつける力すら持つ。しかし、その自由の中に、ふとした静けさが訪れる。それは、孤独という名の影でもある。では、その先に何があるのだろうか。



禅に、十牛図という一連の絵がある。その最後の絵に「入塵垂手」（にってんすいしゅ）---- 山をおりた人が、再び人々の中へ歩み入る姿である。すべてを得た者が、なお山にとどまるのではなく、市井のざわめきの中へ戻っていく。それは、未熟ゆえの回避ではなく、むしろ、見尽くした者の選び直しである。人は、自立の果てに、もう一度つながることができる。しかもそれは、かつての依存とは異なる。世界の中にありながら、世界に飲み込まれない在り方（In the world but not of the world --- 第三フェーズ）。

静かで、しなやかな関係のかたちである。

ふと思い出すのは、「釣りバカ日誌」のハマちゃんとスーさんの関係である。肩書きや立場を越え、ひとりの人間として笑い合い、同じ時間を分かち合う。そこには、役割をほどいた先に生まれる、自由な関係がある。

また、矢野和男著『トリニティ組織』が語るように、人と人は、ただ向き合うだけではなく、**フラットでお互いの感情を考慮しあう関係**が成り立つ組織、集団、家族、友人関係、において、人は生き生きと息をし始める。

あなたは、誰とどう生きていくのか ---- 幸せとは、どこか遠くにある到達点ではなく、それは、誰かとの関係を引き受けた、その瞬間に、静かに灯るものなのだろうと思う。

人は、ひとりでは完結しない。他者との出会い、ときにすれ違いながらも、なお関係の中に戻っていく。その往還の中で、人は少しずつ、自分という存在をひらいていくのではないだろうか。

<事例>

ハーバード大 Waldinger 教授 / TED、何が幸せをもたらすのか
 矢野和男著『トリニティ組織』 / ウェルビーイングな組織とは
 女性経営者・秋山咲恵 / 壁にぶつかる
 NHK プロフェッショナル / 逆境克服法、共感の回路
 ロート製薬 / 社長を“くにおさん”と呼ばせる
 「釣りバカ日誌」 / 上下関係を越えて、人間として向き合う
 映画「海へ」高倉健、いしだあゆみ、馬が暴走、
 磯田道史 / 「郷中教育」薩摩の教育、西郷、大久保、
 スタンフォード大 / イスとテーブルのワークショップ
 スティーブ・ジョブズ / Stay hungry. Stay foolish の意味
 大原麗子 / 第二フェーズの輝き、女優ではなく、俳優を目指す
 歌・「糸」クミコ & 森口博子

円了のホームページ: www.enryo.jp

